

校長会広報

No.872 令和 8 年 9 月 30 日
発行 岐阜県小中学校長会
岐阜市菅原町 3 丁目 3 番地
TEL (058) 265-0338
FAX (058) 263-8892
代表者 上ヶ平 尚 久
印刷 (株) 杉江美術印刷



STE “A” M

岐阜県教育委員会 教育長 堀 貴 雄

8 月の初めに、PLIJ (Platform for Learning Innovation - Japan) の招きで、県立高校で15年続いている「演劇ワークショップ」の実践について、発表を行いました。本県のこの取組を知った主催者からのお誘いでした。

東京大学の藤井総長、演出家の平田オリザ氏と落合陽一氏の講演で会は始まりました。

今回のテーマは、～STEAMの「A」を考える～。
藤井総長は、AIの進展により、STEM分野の在りようが変化するいま、「A」の役割についての話があり、STEMは科学で予想できるものである一方で、社会の課題の多くは、STEMで解決できない、そのため、STEM+創造性が重要であり、教育の現場では5教科の学習とそれ以外の芸術、体育という学びをいかに近づけることが大切であると。また、平田さんからは、演劇教育で他者を演じることで、同情 (sympathy) から共感 (empathy) につながる、同意はしないけれど、理解に努めることを学校で仕組むことが必要であると訴えられました。落合氏からは、「A」は装飾ではなく、計算機自然 (digital nature) を知覚可能にする実践であると。

科学者である藤井総長は、35年前、PC98を使っていた経験、あの「手触り感」が現代においては何なのか？と問いかけられました。

私は、AIがこれから先、予想をはるかに超える方向とスピードで発展する中で、大切にすべきものは、「感性」であると確信しています。

2011年の東日本大震災の際に、さらには、コロナ禍において、多くの芸術家たちは、自分のやっていることは「何？」と自問し、苦しんだと聞いています。しかし、コロナ禍において、私たち (人類) は、「A」がかけがえのないものであることを誰もが実

感したはずで。

この夏に芸術の二つの審査に携わりました。一つは、飛騨市の「飛騨河合音楽コンクール」です。これは旧河合村で二十数年前に始まったもので、私は昨年、飛騨市長と共に専門家ではない立場として参加しています。審査員は日本を代表する音楽家揃いで、今年は岐阜出身のピアニストの上原彩子さんも加わりました。このコンクールが他と異なるのは、様々なジャンルの参加者が競う点です。昨年の第一位はフルート、今年はメゾソプラノでした。そのため、審査する点で大切なのは、参加者が何を伝えたいのかなどであり、まさに感性を競うものです。最初、審査に加わる時は、私のような者が、第一線で活躍する音楽家と評価が異なることを恐れましたが、審査員の皆さんの観点も同様であることに安堵しながらの審査でした。

もう一つは、今年で7年目を迎える「ぎふ美術展」です。これは、日本画、洋画、彫刻、工芸、書、写真、自由表現の分野で競うのですが、年齢制限など参加資格がないのが特徴です。幼児から高齢の方まで同じ土俵で競います。公開で行われる審査の場にお邪魔し、その様子を拝見するとともに、元文化庁長官であり日展理事長の宮田亮平さん、21世紀美術館などの設計者で岐阜にも作品がある建築家の妹島和世さんなど、これも各界を代表する審査員との交流の場にも参加させていただきました。審査員の方からは、「これからの時代はプロとかアマとかの境はなく、ただ本気かどうかだけ」、「芸術は人を助ける」などのメッセージが送られていましたが、最後に、とりわけ私の心に響いた言葉をお伝えします。

書道研究家の名児耶明さんの言葉、

「大切なのは、

あい (愛) うん (運) えん (縁) おん (恩)」

学校現場と教育行政で創り出す「働きがい」のある教育環境の充実

岐阜県小中学校長会 要望活動委員長 小 倉 正 裕

1 はじめに

近年、学校現場においては、特別な支援を必要とする児童・生徒や、外国籍児童・生徒への対応など、多様な課題と正対しながら児童・生徒の育成に努めているところです。その一方で、慢性的な教職員不足により、教職員への負担は増加しています。

要望活動委員会では、そうした学校現場の現状を十分に踏まえ、どの学校のどの教職員も「働きがい」を感じながら子供たちと向き合うことができる教育環境づくりをめざして、県教育委員会に要望・提言を行っていきたいと考えています。

2 要望書の作成にあたって

要望内容は、多岐にわたりますが、今回、特に強い要望のあった次の 4 点を中心に県教育委員会との意見交換会に臨みました。

(1)小学校における教員定数の上積み

小学校の教員定数は、学級数に応じて定められているため、特に小・中規模校においては、職員が出張したり、年休等を取得したりした場合、教頭や教務主任までその補充に入らないと対応できない状況も見られます。こうした切実な状況を改善し、働きやすい職場環境づくりを推進するため、岐阜県独自の教員定数の上積みを強く要望します。

(2)加配教職員の定数の充実と柔軟な活用

小学校において、小学校教科担任等の非常勤講師については、指導する教科や学年に制約があるため、各学校が必要に応じて活用できるように、制約の緩和を要望します。中学校においては、免外解消非常勤講師の配置及び複数校を兼務する加配教員の配置のさらなる拡大を要望します。併せて、養護教諭や事務職員等、一人職の加配についても、地域や学校の状況に応じて対応いただけるよう要望します。

(3)特別支援学級の学級編制基準の緩和等による特別支援教育の充実

特別支援学級においては、1 学級 8 名の上限が定められていますが、特に複数学年が在籍する学級においては、学年や児童の実態に応じた異なる学習支援が同時に必要となり、担任一人では、個別の支援が困難な状況も生まれています。

そうした状況を改善し、きめ細かな支援を充実さ

せるために、学級編制基準の見直しを要望します。

併せて、学級に複数学年が在籍している場合には、複式学級と同様に複式解消非常勤講師の配置及び複式手当の新設を要望します。

(4)すべての教職員が笑顔で勤務できる環境づくり及び学校事務機能の向上

育児支援制度は年々充実してきていますが、その一方で十分な人的支援がないため、他の教職員がその分の授業や校務分掌を分担するなど、働き方改革とは言えない状況があります。そうした負担を軽減するために、授業時間を補填する県費非常勤講師の配置を要望します。また、教員の欠員が補充されない場合の対応として、非常勤講師の配置を認めていただくとともに、職員が授業を分担する場合には、補充手当等の新設を検討いただくよう要望いたします。

学校事務職員の処遇改善及び昇格・昇給についても、共同学校事務室の管理・運営等、より専門性が求められている現状に応じた対応を要望します。

3 県教育委員会との意見交換会

7 月 22 日には、堀貴雄県教育長、浅井孝彦義務教育総括監をはじめ、県教育委員会各課の皆様と意見交換会を行いました。

ここでは「教職員確保と持続可能な学校運営」と「多様な子どもたちを支える教育環境づくり」をテーマとしてグループ別交流を行い、学校現場が抱える課題を共有していただいたうえで、県教育委員会としての考えを伺うことができました。

浅井義務教育総括監からは、課題に対する要望だけでなく、学校経営を具体的にイメージし、その具現に向けた要望も提案できるとよいという助言をいただき、大変有意義な会になりました。

4 おわりに

全ての教職員が前向きな気持ちで児童・生徒と向き合うことができる学校は、子供たちにとっても必ず素敵な学校になります。

今後も各地区の校長会や県教育委員会との連携を密にし、「働きがい」のある学校環境づくりに向けて活動してまいりますので、本委員会の活動にご理解とご協力をよろしくお願いします。

生徒がよりよい生き方を目指す生徒指導の推進

岐阜県中学校長会 生徒指導委員長 丹 羽 宏 樹

1 はじめに

生徒指導提要には、生徒指導の定義として「児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである」と述べられています。さらに「生徒指導は、児童生徒が自身を個性的存在として認め、自己に内在しているよさや可能性に自ら気づき、引き出し、伸ばすと同時に、社会生活で必要となる社会的資質・能力を身に付けることを支える働き（機能）です」とも述べられています。こうした姿は、一方的な指導だけで育むことはできません。各校では、生徒自身が主体となる様々な実践が行われています。

2 校則の意味を考える

よりよい学校生活を送るためにあるはずの「校則」ですが、「校則だから守る」では、現代の「多様な価値観」を大切にする社会の中では行き詰まっています。生徒自身が、校則は何のためにあるのかを考え、それを守ることが安心・安全でよりよい学校生活につながることを自覚することが肝要です。各校でも、校則の見直しが進んでいます。

こうした取組を通して、生徒が自分たちで校則・ルールについて改めて考えることで、意味や目的を理解し、よりよい学校生活を主体的に築こうとする意識を育てることが期待されます。その過程で、意見の違いを尊重しながら合意形成を学び、ルールを自分事としてとらえることで、責任感や規範意識、他者への配慮を身に付けることにもつながります。自分だけではなく、互いにとってよりよいことを考える姿勢づくりが、社会に出ていく上で重要ではないでしょうか。

3 通信機器との向き合い方を考える

タブレットが貸与され、それが『当たり前』となっている生徒たちです。情報モラル教育はこれまでも継続的に行われてきていますが、カメラ機能を使ったトラブルや目的外使用などが後を絶ちません。

また、帰宅後のスマホ等をめぐるトラブルについて、学校が対応に追われることもあります。こうした中で、使用上の『制限』を増やすだけでは、いたちごっことなってしまいます。社会で生きていくためにも自己指導能力を高める指導が行われています。本校でも以下の2点を大切にしたい指導を行っています。

①生徒が自身の機器の扱い方を見つめ直し、より適切な関わり方を意識して使用すること。

②保護者が、生徒の機器の取り扱いに関心をもち、監督する責任を自覚すること。

この二つの取組を進めていくには生徒会執行部やPTA役員との連携が不可欠です。

生徒会執行部は、身の回りにあるタブレット等の使い方について気になっていました。そこでアンケートを実施することとし、生徒がどのように機器を取り扱っているか、どのようなことに気を付けているかなどを調査しました。そして、その結果を学校放送で伝えるとともに、我が子の使い方を心配する「保護者の思い」も紹介しました。それを受けて生徒は夏休みに気を付けることを考えました。今後も、PTAと連携した保護者への発信を行っていく予定です。「大人から言われたから守る」のではなく、『自分たちのために守る』という考えに基づいた約束づくりは、社会で生きていく上で大切な考え方だと思います。

4 おわりに

冒頭に述べた、「社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」は、学校だけではうまくいきません。生徒指導提要に述べられる「発達支持的生徒指導」を基盤とした重層的構造を理解し、保護者や地域の方、行政とも連携しながら、意図的・計画的に実践していくことが求められます。一部の生徒ではなく、すべての生徒が主体的に考える機会をつくり、「よりよい自分（たち）」を目指す営みを、生徒と共に考え、実践していくことが大切だと考えています。

「やりたい」が育つ学校へ

～「午前5時間／40分授業」が生んだ学びと挑戦の好循環～

安八町立結小学校長 中野 由美

1 はじめに

児童は明るく素直で、指示されたことには真面目に取り組む一方、自ら考え、挑戦しようとする姿をさらに育てていく必要があると感じました。

そこで、「自ら学び、自ら動く児童の育成」を目指し、授業改善を中心とした学校づくりを進めてきました。その取組の一つが、「午前5時間／40分授業」です。

2 実践

本校では令和7年度から、1単位時間を40分とし、午前中に5時間の授業を行う時程を導入しました。また、短縮して生み出した時間を活用し、午後の時程の中に25分間の短時間学習「ウルトラタイム」を設定しています。

本実践の目的は次の3点です。

- ①集中力の高い午前中に学習を集約し、テンポのよい授業を通して学びに向かう力を育てること
- ②「ウルトラタイム」を活用し一人一人の課題や興味・関心に応じた学習機会を充実させること
- ③放課後の時間を確保し、授業改善を進めたり児童理解を深めたりすることで、教職員の働きがい向上をさせることと働き方改革を進めること

40分授業の導入に伴い、教職員は授業展開の精選や工夫を進めてきました。学校全体で授業の基本的な時間配分を共有し、「課題提示」「対話」「振り返り」などを意識した授業づくりを進めています。

3 見えてきた成果

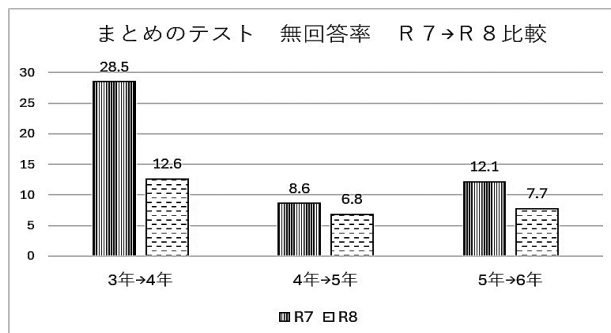
児童アンケートでは、学びに向かう児童の意識に、以下のような変化が見られました。

- ・「授業で一生懸命学ぼうという気持ちをもって、仲間の話を聞いた」 82.5% (R6) → 96.0% (R7)
- ・「授業で自分の考えを分かりやすく話すことができた」 71.0% (R6) → 80.0% (R7)

これらの結果から、児童の「学びへの意欲」や「主体的に取り組む意識」が高まっていることがうかがえます。

また、夏休み前に実施したまとめのテスト（国語・算数）でも、粘り強く学びに向かう力や学力が身に付いてきていることが分かります。

「午前5時間／40分授業」に取り組み始めた令和7年度と、1年後の令和8年度の無回答率を比較す



ると、令和8年度の無回答率が低くなりました。（上記グラフ）



さらに、授業で培われた主体性は、学校生活全体にも広がっています。「〇〇をやりたいです」「こんな活動してみたいです」と、自ら校長室を訪れ、提案や相談を行う児童が増えてきました。学習面の変容は子供たちの積極性や自己表現力の向上にもつながっています。



教職員にとっても、授業改善の成果を子供たちの成長として実感できることが大きな喜びとなっています。子供たちの笑顔に出会えた喜びが、さらなる授業改善への意欲を生み、子供と教職員がともに成長する好循環が生まれています。

4 おわりに

令和7年度末のアンケートでは、児童・保護者・教職員の95%以上が、本実践を肯定的に評価しました。「午前5時間／40分授業」は、単なる時程の変更ではなく、授業改善を起点として児童の主体性を育み、教職員の働きがい高める取組となっています。これからも、「やりたい」と自ら一步を踏み出せる子供の育成を目指し、挑戦を続けていきたいと考えています。

ときには肉食系になってみませんか

多治見市教育長 仙石 浩之



こんにちは。私は、岐阜県内では珍しい行政出身の教育長です。せっかくの機会ですので、多治見市役所で、企業誘致や財政運営を経験した私だからこそ感じていることをお話しします。

市町村の苦悩

現在、多くの市町村は人口減少に悩んでいます。「待ったなし」です。そして、この対策には、相反する二つの指向があります。

①自治体間競争の勝利を指向するもの。転入促進のため、「選ばれる自治体」を標榜、移住者への奨励金や子育て世代への給付を充実させ、企業誘致を促進することなどに注力

②我が道を行くもの。人口減少を受け入れ、そこに住む人が幸せになればよいという考え方。コンパクトシティの形成やコミュニティバスの運行などに注力

この二つの指向には、それぞれ致命的な弱点があります。肉食系ともいえる①については、際限がないという点です。日本全体で人口減少が進む中であって、人を取り合うわけですから、競争はエスカレート、財政的に疲弊するだけでなく、どこかに敗者を生み出します。一方で、草食系で平和的に見える②の場合は、①を掲げる肉食系市町村の格好の草刈り場となりかねません。結局、多くの市町村は、財政状況や市民感情、利害関係者などの意見を踏まえつつ、相反する①と②の指向を適度に織り交ぜながら歩んでいるというのが現実なのだと思います。

多治見市でも、3年前の市長選で現市長が「18歳までの医療費」「3歳未満児の保育料」「給食費」の

三大無償化を掲げて当選、今年度までに実現させました。こうして「子育て世代に選ばれるまち」(①肉食系)を指向する一方で、市庁舎の駅前移転など、人口減少を見据えた合理的で便利なコンパクトシティ(②草食系)にも取り組んでいます。

公立小中学校は草食系？

こうした二つの指向を学校に当てはめて考えてみましょう。減り続ける子どもの獲得に向け、魅力づくりに躍起となる私立学校は①の指向に近く、たとえ児童生徒が減ったとしても、目の前にいる子供たちの健やかな成長を支えていきたいと願う公立小中学校は②の指向に近いように映ります。

どちらが正しいのか、そういう問題ではありません。長年にわたり市職員を務めてきた私自身、二つの指向の間を揺れ動いてきたのです。

まちの行く末と学校

ここからは、私の勝手な考えをお話しします。公立小中学校は、学校区が指定され、児童生徒の獲得競争がないことは分かっています。そうであっても、①の指向が必要ではないでしょうか。外に向かって、学校の特色や魅力をどんどん発信していく姿勢、入学してみたいと思わせる学校紹介、教育委員会も一体となって、そうした取組を増やしていけば、市町村の人口対策部署は放っておきません。その市町村の魅力としてアピールします。「私たちのまちには、こんなすばらしい教育を提供する小中学校がありますよ！子育て・教育のまち〇〇市に住んでみませんか…」まちの行く末と学校がリンクするのです。そして、それはいま通学している子供たちの自信にもなり、結果として②の指向、すなわち現在の通学者の満足度も向上させるのではないのでしょうか。

公立校、お肉を食べて、頑張ろう！

東西南北

"ひまわり"の学校

郡上市立大和中学校長 永井 伸幸

本校は、全校生徒158名（各学年2学級、特別支援学級2学級）の学校です。学校の教育の目的を「自立・共生」とし、「自ら考え取り組む生徒（主体性）」「自他を思いやり行動する生徒（思いやり）」を教育目標として掲げています。

教育目標に加え、平成13年に制定された人権宣言「ひまわり宣言」（下記）を、生徒も教職員も大切にしています。

- ひ 人の心と体を大切にします
- ま 周りの公共物を大切に扱います
- わ 分けへだてなく誰とでも接します
- り 理解し合える人間関係を作ります

歴史のある人権宣言ですので、「ひまわり」は、人権、いのちを尊重する校風の象徴として、地域でも大切にされるようになっていきます。

ひまわり満開プロジェクト

校舎横の休耕田をお借りし、毎年、ひまわり畑を作っています。種植えから水やりまで、生徒がボランティア活動として、ひまわりを育てることが伝統となっています。



「いのちの教育」の推進

こうした背景もあり、令和5年度から3年間、「いのちの教育」研修校（郡上市教育委員会指定）となり、教育活動全般を通して実践を重ねてきました。今年度も自分の「いのち」も、周りの「いのち」も大切にできる生徒を育てたいと考え、取組を進めています。



クラウンロードがつなぐ次世代の交流

揖斐川町立北方小学校長 宗宮 一夫

本校は、揖斐川町の北部に位置し、坂内、藤橋、久瀬、北方の4地区の児童74名が集う学校です。

2023年、隣接する福井県池田町につながる冠山峠道路（クラウンロード）が開通しました。これを機に「2つのふるさとを再確認し新たな文化の創出」を願い、双方の教育委員会・小学校間で交流計画を練りました。そして7月には福井県池田町立池田小学校6年生（17名）と本校6年生（18名）が、徳山湖、徳山ダムで交流しました。

当日は徳山湖上ボート体験、芝生の上での昼食、徳山ダム内部の見学などを行いました。事前にオンラインで顔合わせをしていたとはいえ、当初は



徳山湖ボート体験

お互いに緊張した様子も見られました。しかし声を合わせてボートを漕ぐうちに次第に表情も和らぎ、笑顔が増えていくのがはっきりと分かりました。子供の適応力に驚くとともに、ダムの壮大さとダム湖に沈んだ旧徳山村に思いをはせるよい機会となりました。普段気付かないふるさとのよさや歴史を再確



輪になって昼食

認し、隣県の同級生と交わり、考えを深めることができた経験は、これからの社会をつくる子供たちにとって貴重な財産となりました。

揖斐川町は県境に位置し、他県の文化や生活に触れる機会に恵まれた町です。普段は大垣や岐阜など南の方を意識して生活している私ですが、北に目を向ければ、壮大な風景が広がり、その先には平野や日本海、そして、そこに息づく人々の生活があることを改めて認識しました。さらに西には、これまた大きな琵琶湖やそこで暮らす人々の生活があります。

県を越えた周辺地域を知り、再度ふるさとに目を向ければ、もっとたくさんのよさに気付くことができます。若い力ならではの交流を生み出し、新しい文化を創ることもできるでしょう。

次回は福井県池田町での活動となります。子供たちが福井のよさを知り、ふるさと揖斐川のよさも実感できたらと思います。

夢や希望を育む感動ある学校づくり

～互いに高め合うことができる研修を生かして～

羽島郡小中学校長会

1 はじめに

羽島郡小中学校長会は、小学校 6 校、中学校 2 校の校長 8 名で構成している。岐南町と笠松町の二つの町からなる羽島郡は、面積は小さいながらも両町とも活気があり、人口減少の幅も小さい。この 10 年で、特別支援学級数や、特別支援学級に在籍する児童生徒数が大きく増加し、特別支援教育に関する校長のマネジメント能力がこれまで以上に求められている。また、教職員の年齢構成では、1 校完 2 校完の 20 代の若手教職員の割合が高く、どの学校においても若手教職員の育成は重要な課題となっている。

2 校長会における研修の構え

校長には、将来を見据えた学校経営ビジョンに基づく創意と活力ある学校経営のリーダーシップが求められている。また、学校が対応する課題が複雑化・困難化するとともに、家庭・地域をめぐる環境が変化する中、教師が、学びに関する高度専門職としての本来の役割を果たしていけるよう、働きやすさと働きがいと両立させた学校の在り方が問われている。

これまでの前例踏襲ではなく、子供たちが「自らの人生を舵取りし、民主的で持続可能な社会の創り手」となっていけるように、次期学習指導要領を見据えた教育活動を編成し、夢や希望を育む感動のある学校づくりを進めていきたい。

その実現に向けて、校長会における研修の意義は

大きい。各学校、地域、教職員の強みをどのように生かし、学校経営につなげていくことができるかを考え、互いに高め合うことができる研修を目指している。

3 研修の実際

(1)実践から学ぶ

校長会をすべての小・中学校で実施し、会場校の校長が、学校経営に関わる実践発表及び提案を行う。会場校の実践内容を自校の教育活動にどう生かしていけるのかという視点をもち、学び合う場としている。特別支援教育や若手教職員の育成等については、共通の課題として各校の取組を交流している。

(2)講話から学ぶ

学校経営をする上で、社会の動き、国や教育行政の動向を迅速かつ的確に捉えることが必要である。岐阜教育事務所長や羽島郡二町教育委員会教育長の講話から学ぶ場を位置付けている。また、毎月の校長会では、羽島郡二町教育委員会から指導助言を受け、学校経営の充実につなげている。

(3)研修視察や懇談から学ぶ

スクールロイヤーとの懇談、他の教育施設の視察等を通して、校長自らが学び、学んだことを教職員へ伝え、「チーム学校」として諸問題に対応することができるようにしている。



心ゆたかに たくましく未来を拓く 子供たちを目指して

岐阜市立網代小学校長 棚 橋 英 生

本校は、岐阜市で唯一の複式学級がある小規模校です。校長室の窓からは、休み時間のたびに、1 年生から 6 年生までが入り混じって、広い運動場で楽しく遊び回る子供たちの姿が目に入ります。異学年で活動する様子は掃除でも見られます。児童数に対して広すぎるとも感じられる校舎内を異学年の子たちが協力しながら静かに時間いっぱい掃除をする姿を見ると、「この子たちって本当に凄い！」と感心させられます。

その一方、ずっと同じ仲間と活動する中で、優しく接してもらえたり、言葉が少なくても自分を分かってもらえたりします。そのため、自分の意見をあえて言わなくても何とかなっていく環境に慣れ、人間関係の固定化を招いているのではないかと危惧しています。

こうした課題を少しでも解消するため、回数は少

ないですが、1 年を通して、全ての児童が全校の前で、自分の頑張っていること等を発表したり、友達の発表を聞いて感想を交流したりする機会（表現タイム）を設けています。学校で見せる姿とは違った自分の一面を紹介したり、高学年になると、タブレットを使って発表したりする児童の姿も見られます。

また、学習面でも、オンラインで他校とつながり、一緒に国語や算数、道徳などの授業を行う機会（小規模校つながる教室推進事業）を設けています。いつもと違う仲間の中でも、時にはタブレット等を使って自分の考えを述べ、いくつかの異なる考えに触れることで、より豊かな学びが生まれています。

これらの活動を通して、どんな集団の中でも自分の思いを伝えていく力や、相談し合って互いに納得できるものを見つけていく力を身に付けてほしいと願っています。

挨拶を磨こう 「自分から」

美濃加茂市立下米田小学校 安藤 由美子

4月の始業式にこんな話をしました。
「元気な挨拶や、その場を考えた会釈は下米田小の宝です。今年は、この挨拶にさらに磨きをかけていきましょう。キーワードは、『自分から』です。」
あれから3か月、あなたの姿はどう変わりましたか。

この前、驚いたことがありました。用事で学校の外に出かけようとしていたとき、「校長先生、こんにちは！」と呼びかける声が聞こえます。でも、周りには誰もいません。どうやら頭の上から聞こえます。声のする方をたどると、2階から挨拶をしてくれる子を見つけました。地域で、「校長先生！」と声を掛けられたこともありました。見ると、通り過ぎる車の窓から、元気に手を振ってくれていたのは、4年生のAさんでした。廊下ですれ違った時に、自分から挨拶をしてくれる子が増えました。

遠くからでも、学校の外でも、自分から挨拶する姿は素晴らしいですね。挨拶は心のキャッチボール。した人もされた人もよい気持ちになります。

明日から夏休みです。学校の外でも、自分から挨拶する姿を大切に、家族や地域の人に気持ちのよい挨拶を続けましょう。夏休みが終わる9月には、さらに下米田小の挨拶に磨きがかかっていることを期待します。

【講話のねらい】年間を通して意識させたい挨拶について、今の自分たちのよさを自覚し、校外でも同様にできるようになってほしいと願って構想した。

自分だけの「正解」を作り出す(夏休み前集会の話)

瑞浪市立瑞浪中学校長 中島 鈴夫

皆さんは「スマホ農場（クリックファーム）」を知っていますか？薄暗い部屋で膨大な数のスマホを使って「いいね」や再生回数を稼ぎ続ける場所です。

皆さんがSNSやYouTube等で目にする流行や数字は、こうした「農場」で作られた人工的な熱狂かもしれません。誰かが作った「偽物の正解」を自分の価値基準にするのは、あまりにも残念なことです。

だからこそ、この夏休みは、あえて「ちょっと立ち止まって考える」ことから始めてほしいです。「百聞は一見に如かず」、今の時代なら「百クリックは体験に如かず」。画面の情報は、誰かが加工した二次情報に過ぎません。この夏休みは、自分の五感で「真の情報」を掴み取ってください。

- ・ネットで「簡単」な料理を実際に作ってみる。
- ・動画で見た技をヘトヘトになるまで練習する。
- ・誰も見ていない空の色をじっくり見つめてみる。

その時、皆さんの肌が感じた熱さや、心の震えこそが、画面の中では絶対に作れない、あなただけの「正解」になります。

夏休みは「自分という原石を磨く貴重な時間」です。失敗を恐れず、直感に従って挑戦した分だけ、皆さんの個性は輝きます。

ネットの中に「正解」を探すのではなく、現実世界で自分だけの「正解」を作り出してください。

夏休み明けを楽しみにしています。

【講話のねらい】夏休みは、自分で使える時間が多く、SNSやYouTube等に触れる時間が多くなりがちである。自分の時間だからこそ、人生に生かせる実体験を重ねる夏休みにしてほしいと願った。



◆会議案内（10月・11月分）

小中学校長会				小学校長会				中学校長会			
月日	曜	時	会議名	月日	曜	時	会議名	月日	曜	時	会議名
10. 1	木	9:10	役員会⑫・企画部会⑤	10. 1	木	9:00	全連小北海道大会(札幌市)	10. 6	火	10:00	企画委員会⑥
				2	金	9:00	〃	14	水	13:00	全日中理事会
				5	月	10:00	分科会推進委員会②	15	木	9:30	全日中長野大会(長野市)
				22	木	12:00	東陸連小福井大会(福井市)	16	金	9:00	〃
				23	金	9:00	〃	23	金	9:30	東海修学旅行委員会②
				29	木	10:30	全連小対策・調研(大阪府)	11. 4	水	10:00	理事会①
11. 4	水	14:00	役員会⑬・企画部会⑥	11. 5	木	15:00	研究総会準備委員会	19	木	13:00	研究総会準備委員会
				6	金	10:00	研究総会西濃地区大会(大垣市)	20	金	9:00	研究総会美濃地区大会(関市)
				16	月	9:30	役員会⑨	未定			県教委との懇談会
				26	木	14:00	東陸連小事務局会(福井県)	26	木	13:00	東陸中事務局会(愛知県)
				27	金	9:00	〃	27	金	9:00	〃
								30	月	10:00	企画委員会⑦

編集後記

「秋の日はつるべ落とし」のことわざのとおり、日暮れが日に日に早くなるのを実感する季節となりました。学校も年度後半に入りますが、ここからは前半以上に時の流れの早さを感じながら、一日一日を過ごしていくことになるでしょう。本号にご寄稿いただいた皆様のお言葉や実践から得た学びを、年度後半の学校経営に生かしてまいります。